

IV-17

地方部における循環型バス運行が住民のモビリティに及ぼす影響

秋田大学 学生員 ○加藤 紘
秋田大学 フェロー 清水 浩志郎
秋田大学 正員 木村 一裕

1. はじめに

地方部市においては、近年自動車の普及や郊外化の進展等によりバス交通利用者の減少傾向は顕著であり、バス事業そのものの存続が危ぶまれる状況にある。とくに地方部においては都市部と違い需要が小さく、よりその傾向は顕著である。本研究では地方部における効率的なバスサービスの事例として雄和町の循環バス「ユーグル」に注目し、循環型バスが住民のモビリティに及ぼす影響を考察する。

2. 雄和町と循環バス「ユーグル」について

秋田市から車で45分の雄和町は、人口8千人、人口密度約58人/km²のベッドタウンである。雄和町は平成12年8月1日に循環バス「ユーグル」をスタートさせた。以前は秋田市からの路線バスがそれぞれの地区に独立した路線を持ち運行していたが、役場を発着点とした循環バスと、秋田市とを結ぶ基幹バスを連結することにより、効率的なバス運行が行われている。また路線の変更により、導入以前に比べ町内の温泉施設等の利便性が向上した。図-1、表-1に詳細を示す。

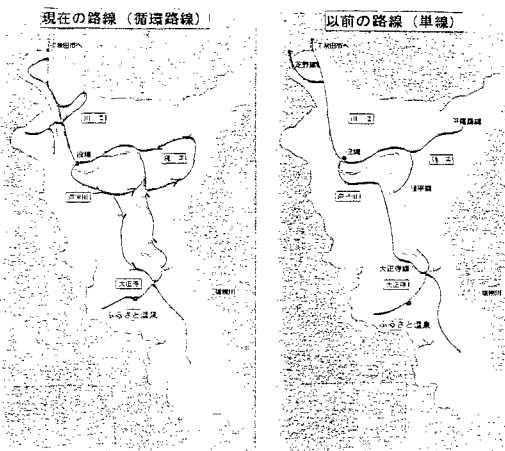


図-1

表-1 ユーグル詳細

事業主体	雄和町	
運行主体	秋田中央交通	
運行路線	南循環2路線 (内回り、外回)	北循環1路線
運行本数	15.16本	5本
料金	全区間100円	

3. 循環バス利用の実態

本研究では、雄和町民の循環バス利用実態と評価、住民のモビリティの変化等を把握するために、雄和町の全世帯を対象にアンケート調査を行った。配布数は四千票で回収数は表-2のとおりである。

表-2 調査概要

調査期間	平成12年12月	
調査対象	雄和町の全世帯	
有効票数	709票	
回収率	21%	
調査結果	①性別	男性53% 女性47%
	②年齢	20代未満9% 30～40代24% 50代22% 60代以上46%
	③職業	会社員・公務員30% 自営業17% パート・アルバイト5% 学生6% 主婦16% 無職24%
	④地区	川添地区46% 種平地区23% 戸米川地区19% 大正寺地区12%
	⑤免許	有り66% 無し34%
	⑥循環バス利用	毎日利用4% 週2.3日利用4% 週1日利用6% 月1日利用9% 利用しない77%

(1) 利用者の属性

循環バス利用者の属性を図-2に示している。性別は女性が多く、年齢では「60代以上」の高齢者が半数以上を占めた。また職業、免許の有無から利用者の大半は自動車を運転しない人が占めている。

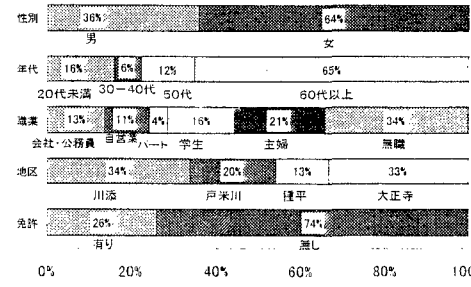


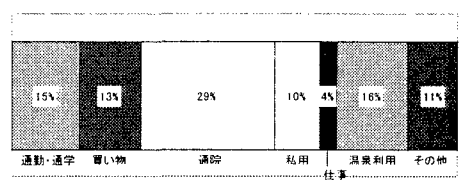
図-2 利用者の個人属性

(2) 利用交通機関の変化

循環バスが導入されたことで町役場までの交通パターンが変化した人は 72 人（全体の 11%）で、その内訳は「路線バス」から「循環バス」が 33 人と最も多く、次いで「自家用車で送迎」から「循環バス」への転換が 15 人であった。また秋田市街地までの交通パターンが変化した人は 60 人（9%）で、その内訳は「路線バス」から「循環バス＋基幹バス」が 28 人で最も多く、「自家用車で送迎」から他の交通手段に転換した人は 6 人であった。

(3) 利用目的

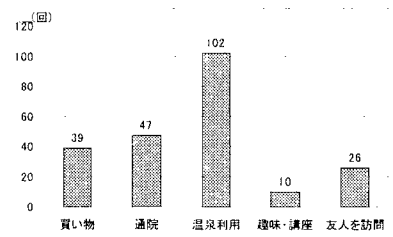
図－3 に示す循環バスの利用目的は「通院」に続き「温泉利用」が多く、福祉面での利用において重要な役割を持っている。



図－3 利用目的

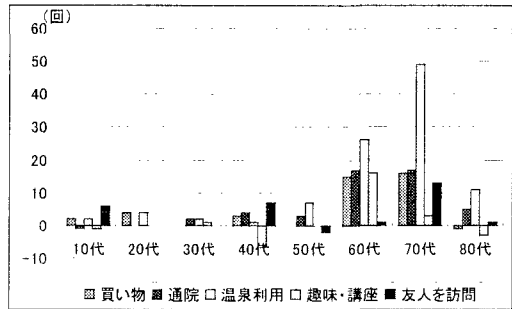
(4) 外出回数の変化

「ユーグル」が導入されたことによる外出回数の変化を図－4 に示す。最も増加した目的は「温泉の利用」で全地区で増加している。また循環バス利用者がある世帯の中で 6% の人が「家族を送迎する回数」が減ったと答えている。したがって「ユーグル」の導入によって、これまで送迎にかけていた時間を他の目的に使えるようになったものと考えられ、循環バスが利用者のみならず非利用者にも便益をもたらしていることがわかる。



図－4 目的別外出回数の変化

図－5 は年代別の外出回数の変化を示している。60 代以上の年齢層において、温泉利用を含め多くの目的で外出回数が増加しており、循環バスは高齢者のモビリティに影響を与えていることがわかる。

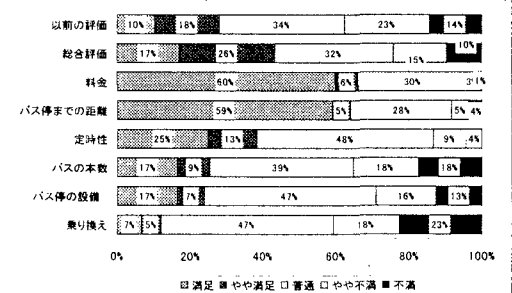


図－5 年代別の外出回数の変化

4. 「ユーグル」に対する住民の評価

(1) 導入前後での満足度の変化 (図－6)

現在の循環バスの評価によると総合的な満足度で「満足」、「やや満足」の合計は 28% から 43% に増加した。また数量化Ⅱ類により分析を行った結果、「料金」と「乗り換え」のアイテムのレンジが大きいことがわかった。これは実質的な値下げによる使いやすさが評価された反面、乗り換えの不便さが増加した結果と考えられる。



図－6 現在の評価

(2) 「ユーグル」に対する負担意識

住民の負担意識を調べるために、CVM による分析を行った。その結果、全体の 45% が「負担する」と答え、その支払い意欲額 (WTP: Willingness To Pay) は平均値で 5502 円/年であった。年代別の WTP に大きな差は見られなかったが、利用者がいない世帯の平均値は 3674 円/年に対し、利用者がある世帯の平均値は 6680 円/年と大きく差が出た。また、利用頻度が大きくなるほど WTP が小さくなる傾向がみられた。

5. まとめ

本研究では循環バス「ユーグル」の利用実態、利用特性、負担意識の分析を行った。今後、地方部においての循環バスを評価する課題として経営面での有用性を判断する必要があると考えている。